

ミャンマーの農村におけるハンセン病の疫学調査

並里 まさ子¹ 柏原 嘉子² 松岡 正典² 藤原 剛³ 小川 秀興⁴
KHIN NWE OO⁵ KYAW KYAW⁶

国立療養所 栗生楽泉園¹ 国立感染症研究所 ハンセン病研究センター² 奈良大学 自然科学教室³
順天堂大学 皮膚科学教室⁴

Immunology Research Division, Department of Medical Research⁵
Central Special Skin Clinic, Yangon General Hospital⁶

途上国の多くは限られた財源で、生命に直接的な危険をもたらす多くの疾患に取り組みねばならず、フィラリア症、住血吸虫症、腸管寄生虫、ハンセン病、トリパノソーマ、リーシュマニアなど Neglected Diseasesと総称される疾患への対策は不十分となりやすい。しかしこれらの疾患は、長期に渡って人々の生活の質を著しく低下させ、地域全体の活動性にも大きく影響する。ハンセン病は、生命に直接的な脅威を与えることが少ないという意味で、その代表的な疾患と言えよう。現在では障害無く治癒に導ける疾患であるが、治療が遅れば、さまざまな後遺症を残す。ハンセン病対策の最大の重点は、常に早期発見・早期治療に置かれている。1982年以降の多剤併用治療（MDT）の普及によって、世界のハンセン病対策は大きく変化した。しかし今なお毎年約50-60万人の新患者があり、その中には既に障害を持って診断される例も後を絶たない。我々のNGO（Nirvana）は、流行地におけるハンセン病の発症予備群を把握し、それらを予防投与に繋げることを目指して疫学調査を続けている。また近年、新患者の保有する菌にも薬剤耐性株が発見されていることより、現地での調査を開始した。対象と方法1) ミャンマーバゴー管区は古くからハンセン病の流行地で、その中のKyanbokone村（K村）は、人口306人の農村である。我々は、現地保健省直轄のDepartment of Medical Researchと協力し、2000年よりK村の住民を対象に、らい菌特異的な抗PGL-I抗体をELISA法にて測定し、経時的な推移を観察している。我々は必要備品と技術指導を提供し、測定は現地スタッフが行う。2) Yangon Special Skin Clinic（YSSC）は、ミャンマーにおけるハンセン病治療の中心的な機関である。ここの受診患者を対象に、薬剤耐性の検査を開始した。結果K村のらい菌特異的抗体の陽性率は、全体を通じて約38%、10歳以下では28%、30歳以下では49%であった。10歳以下の陰性例は、3年間のいずれかの時点で、半数以上が一度は陽性になっていた。また4年間連続して陽性の7例中、2例が発症した。また他の発症者1例は、初年度陰性で、翌年より陽性となっていた。YSSCの受診者中、これまでに2例の薬剤耐性株を発見した。MDTの効果が懸念されることより、さらに広範囲での調査を予定している。考察 かつては未治療の患者が唯一の感染源とされていたが、抗体陽性率の高さは対策の再検討を促すものと考えられ、今後環境内らい菌の調査を予定している。また抗体価とその変動から、発症予備群の把握が可能か検討する。薬剤耐性については、対象を拡大した調査が必要と思われる。

Epidemiological study of leprosy in a local village in Myanmar

MASAKO NAMISATO

National Kuryu-Rakusenen Sanatorium, 647, Kusatsu-machi, Gunma-ken, Japan